

病みつつ在るということ——人間学的精神病理学を超えて

野間俊一（京都大学）

20世紀の精神科臨床は個々の医師の経験に頼るところが多かったが、1980年には症状の有無の確認という一定の手続きによって誰もが同じ診断に行き着く操作的診断基準「DSM-III」が誕生し、それは昨年発表された「DSM-5」にも受け継がれている。しかしこの操作的診断は症状の集合体としての精神疾患理解に基づいているのだが、20世紀精神医学の中核にあったのは、精神疾患はある本質を共有する単位であり、しかもその疾患の本質には病者の人間としての苦悩が反映されているという人間学的理解だった。つまり精神医学では、つねに病める人の存在のあり方が問われていたのである。

ただし20世紀の人間学がとくに考察対象としたのは、脳器質的にも心理学的にも原因を見つけることのできない内因性精神疾患の統合失調症だったが、今世紀に入り統合失調症は複数の関連遺伝子からなる症候群であることが明らかとなり、患者の脳の形態学および機能的異常についての知見が蓄積されていることから、この疾患の本質を追求した従来の人間学的理解には生氣論的先入見による偏りがあったということは認めざるを得ない。

ここで、キリスト誕生の遙か昔から記述のある「解離」という精神現象を採り上げよう。解離とは、記憶、自己同一性、感覚、身体運動といった心身の正常な統合が失われた状態を指し、具体的には、健忘、遁走、昏迷、トランス、離人、現実感喪失、人格交代、麻痺、けいれん、意識消失など、さまざまな症状をとりうる。解離症状が持続している病態を解離性障害と呼ぶが、その患者には過去に虐待や暴行被害など心理的な外傷体験があることが多く、自殺企図が高頻度でみられるのが特徴である。わが国の臨床場面では、2000年前後から解離症状を訴える人が増え、とくにそれまではあまり見られなかった解離性同一性障害（多重人格）の患者にしばしば出会うようになった。

このように解離症状は多岐にわたるが、その中核病理は「経験の主体性喪失」と言い表すことができるだろう。離人や現実感喪失は現在の経験が自分の経験であるという実感の喪失であり、麻痺は運動についての能動感の喪失である。解離性同一性障害は仮の主体性を作り上げるという主体性喪失の最たるものである。

解離性障害患者のもう一つの特徴は、親しみのあるものからの離反と接近の反復である。対人関係がまさにそうであるし、親に対して感情的に両面的態度をとる者もいる。遁走や生活史健忘は「わが家」や自分の「来歴」からの離反であるが、それでも自分の来歴に関

心を示すことが多い。彼らが拒絶しながらも求める対象は、他者との情緒的な交流、家庭、親、来歴、祖先、故郷といったものであり、これらに共通の因子を「故郷性 (Heimat)」と呼ぶことにする。それは、自己の存在を無条件に全面的に受容し承認する根源的な因子である。

私たちは日常的に、私たちを取り巻くさまざまな対象にさまざまな程度に親しみを感じているが、それは諸事物が故郷性を内包しているからためと考えることができる。このような故郷性はそれとは直接意識されないながらもたしかに生活に生気を与え、そしてその対象を認識する自己の主体性を保証している。逆に解離のある人では主体性が希薄になり、同時に故郷性が重要なテーマとして前景化するのである。つまり故郷性とは、自己と世界を同時に成立させる「存在」それ自体に関わる因子である。

ハイデガーは『ヒューマニズムについて』のなかで、人間は存在へと身を開きそこへと出で立つと説き、その際の存在への近さをヘルダーリンに倣って「故郷 (Heimat)」と呼んでいるが、これは私たちの「故郷性」ときわめて近縁にある。ハイデガーは、人間が存在者のみに働きかけを行う存在忘却のしるしとして故郷喪失という頽落を論じている。この考察と重ね合わせるならば、通常私たちは故郷性をそれとは意識しないかたちで感じ取りながら生きているのだが、故郷性を意識し自己存在の意味を問うことが、その人間固有の存在を存在するという本来性を生きるという側面をもつのではないだろうか。

存在そのものに関わる故郷性は人間のあらゆる活動の基盤となっているという意味で、非人称の主体と考えることができる。それは、自己の主体を支えると同時に世界のうちの諸対象の存在をも同時に成り立たせている主体である。自分の存在が揺らぐような苦痛な体験は、このような非人称の主体を危うくし、基盤を失った個別の主体性も希薄になってさまざまな解離症状をもたらすことになる。

解離は古くから認められ誰にでも起こりうる現象であることから、人間に普遍的に備わる生き抜くための心理機能である。どのような疾患であっても、その苦痛を抱えて生きる限りは自らの存在を問い、さまざまな程度で故郷性というテーマと向き合うことになる。その向き合い方を模索することは、病を生きるために意義をもつはずである。そしてこのことは、健康と思われている私たちにも同様に意義をもつはずである。